慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジャッフェ『ワルラス論集』に寄せて
Sub Title	On William Jaffé's Essays on Walras
Author	早坂, 忠
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1985
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.78, No.4 (1985. 10) ,p.350(34)- 369(53)
JaLC DOI	10.14991/001.19851001-0034
Abstract	
Notes	小特集 : レオン・ワルラス
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19851001-0034

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小特集：レオン・ワルラス

ジャッフェ『ワルラス論集』に寄せて

早坂　忠

I　はじめに

ワルラスに今日かなりの関心を寄せる人で，ワルラスの名とともにウィリアム・ジャッフェ教授の名を思い浮かべぬ人は先ずあるまい。ジャッフェ教授は，1980年，82歳の高齢で長逝されたから，昨年ワルラス生誕150年を迎えた今年1985年は，ジャッフェの没後5周年に当っている。

1983年，生前ジャッフェと親しかったペンシルヴァニアのインディアナ大学教授ドナルド・A・ウォーカーの編集で，ジャッフェのワルラスに関する研究論文のすべて[1]を収録した『ウィリアム・ジャッフェのワルラスに関する論文集』（ジャッフェ〔14〕，以下本文ではジャッフェ『ワルラス論集』ないし単に『ワルラス論集』と略記する）が公刊された。この『ワルラス論集』を中心に，ワルラス生誕150年記念にふさわしい然るべき事柄を，かなり自由な形で書くように，というのが私への要請である。より適任者は他に数多いのだが，1974年秋来日されたジャッフェ教授を囲んで箱根でワルラスの『純粋経済学要論』第1版第1分冊の公刊100年を記念する，教授を含めて計10人での「ワルラス研究シンポジウム」が開催されたとき，ペーパー（早坂〔2〕）を読んだことや，そのときのジャッフェ教授の温顔が改めて思い浮かんだことなどもあって，結局お引受けすることにした。そのうえで改めてジャッフェ『ワルラス論集』の全体や，かつて読んだもの，その他に目を通していると，いくつかの書き方が考えられてきたのだが，紙幅の関係その他から，結局，本稿は次のような構成にすることにした。

まず次の第II節で，ほぼウォーカーの2論文（〔26〕，〔27〕）に依拠して，ジャッフェの略伝を述べる[2]。次いで第III節で，ジャッフェ『ワルラス論集』全体を簡単に紹介し，そのうえで，ジャッフ

注（1）　ただし，後に触れるジャッフェの『ワルラス伝』の部分的草稿は除く。なお，偶目したジャッフェ『ワルラス論集』の書評にコラードのそれ（〔1〕）がある。

（2）　第II節でのジャッフェ略伝は，紙幅上，全くのスケルトンのみに留めざるをえないが，依拠したウォーカーの2論文，ことに〔27〕には，ジャッフェがまだマーシャルもよく知らぬ1928年，ノースウエスタン大学に採用されながらもマーシャルを教えなければならぬことに当惑し，当時ロンドン・スクールにいたアリン・ヤング（Allyn Young）

ェ『ワルラス論集』所収19論文のうち8論文は既に邦訳されている（詳細は第Ⅲ節参照）ことでもあるので，同書収録論文のうち発表時の関係からまだあまり論議されていない，最後の1980年論文，1981年論文を中心に，第Ⅳ節で，ジャッフェのワルラス論の特徴をより立ち入って考察する。第Ⅳ節の考察を上記2論文を中心としたことには，次の事情も多少関係している。周知のように1977年，森嶋通夫の非常に独特な所論を展開した『ワルラスの経済学』（〔17〕）が公刊されて，内外で多くの論議(3)を呼んだ。ジャッフェの前記の最後に書かれた2論文は，『ワルラスの経済学』における森嶋のワルラス解釈に対する批判が中心になっている。本稿をお引受けした当初は，森嶋のワルラス論については某氏が執筆されるはずと伺っていたので，本稿では森嶋のワルラス論には立ち入らず，ジャッフェの前記2論文についても，彼のそれ以前の論文における所説との関連を中心にするつもりだった。ところが，その後，止むをえぬ事情から某氏が森嶋のワルラス論執筆を辞退された旨を伺った。前記『要論』公刊100年を記念する箱根での「ワルラス研究シンポジウム」にちなんで公刊されたジャッフェ論文の安井・福岡編訳書（ジャッフェ〔13〕）の「編訳者まえがき」や，誤差なしのワルラス生誕150年の昨年おこなわれた安井・福岡の記念対談（安井・福岡〔33〕），さらにウォーカーの1984年論文（〔29〕）で強調され，またジャッフェ自身はっきり意識し明言しているように，思想史家ジャッフェのワルラス解釈と理論家のそれとの相違が最もはっきりした形で表われているのは，このジャッフェの森嶋批判論文においてである。その意味では，私にとってはやや偶然の事情からそうなったにせよ，この2論文を森嶋批判に焦点を合わせて取りあげることによって，別な面を中心にした場合よりも，思想史家ジャッフェの特徴を，より具体的な形で浮かびあがらせえたのではないか，と考えている。

Ⅱ　ジャッフェ略伝

ウィリアム・ジャッフェは1898年6月16日，ロシアから移住したユダヤ系の両親の唯1人の子として，ニューヨークのブルックリンで生まれた。両親は彼に，学問の重要性と，平和主義・社会主義・宗教上の不可知論の正しさとに対する確信を植えつけた。ジャッフェは1915年，ニューヨーク

に紹介を得て助言を求めた際にヤングの論した言葉や，マーシャルを教えだし，その『原理』の数学附録をも理解しなければならなくなってそこを検討し始めたところ，du/dx などの記号が数多く登場するにもかかわらず，分母と分子の d が消去されぬままになっているのに驚いたこと，そして数学も習得し，それも駆使してやがてワルラス研究に向かったうえでは，ノースウエスタンの雰囲気が経済学への数学利用に対して敵対的であり，種々の要因からの昇進の遅延も絡んでノースウエスタンの環境はジャッフェのワルラス研究にとって決して恵まれたものではなかったこと，等々，論文自体そう長いものではないけれども，『ワルラス論集』の編集との関係で多分晩年のジャッフェから聞かされたのであろう（cf.〔27〕p. 37）数多くの興味あるエピソードが掲げられている。ウォーカーのジャッフェ『ワルラス論集』の編集の経緯やその編集方針については，同書へのウォーカーの Preface を参照されたい。

注（3）わが国でのそれとしては，例えば，根岸隆〔19〕，根岸〔20〕pp. 200—5，を参照されたい。

のシティ・カレッジに入学し，18年6月20日，英語英文学・古典語古典文学の最優等の学士号を得て同校を卒業，その9月からコロンビア大学の大学院に進み，19年，歴史学の修士号を得た。次いで，アンダーグラジュエト時代にその国際法のコースをとっていたベルギーの法律家で1913年のノーベル平和賞受賞者，H. M. ラフォンテェーヌの影響下に，ジャッフェはコロンビア大学の大学院博士課程で国際法の研究をしようと決心したが，そのためには現代語への習熟が十分でないことが分かったので，当時ヨーロッパの通貨価値が非常に下落していたことにも助けられて，ヨーロッパで1年間（当初の予定ではフランスで6カ月，ドイツで6カ月）を過ごす計画をたてた。

1921年5月，フランスに到着したジャッフェは直ちにそこの文化とフランス人の生き方（way of life）に強く惹きつけられ，そこで高次の学位をとりたいと思うようになり，パリ大学で国際法の研究を始めた。間もなく彼は同じく学生だった一イギリス女性と会い，22年1月彼女とパリで結婚し，33年に1人の娘と，35年に双子の息子とを得たが，彼女との結婚は性格や関心の相違のため，結局は離婚に終った。パリ大学でのジャッフェのフランス語の習得と国際法の研究は急速に進歩した。にもかかわらず，1923年のフランスのルール占領の結果，彼は平和主義が国際政治で採用される見込みはないとの結論に達して国際法を研究する動機を失い，主として社会主義に対する関心から，その代りに経済学を研究しようと決心し，ある文化圏の思想を他の文化圏の人びとに伝える彼の生涯にわたる仕事の手始めとして，ヴェブレンに関するフランス語の論文〔8〕を書き，24年6月，経済学＝政治学博士号を得た。

その後ジャッフェは，暫くのあいだフランスで戦後のフランスの経済事情を調べる仕事をした後，1928年，ウェズリー・C・ミッチェルの推薦で，ノースウエスタン大学で大学院生にマーシャルとヨーロッパ大陸の経済学者について教えることを職務とする助教授の地位を獲得した。ノースウエスタンに着いて間もなく，ジャッフェは，同じくシティ・カレッジの卒業生でシカゴ大学の経済学者だったヘンリー・シュルツと親交を結び，このことがジャッフェをワルラス研究に向かわせる上で重要な契機となった。ヨーロッパと大差なく，当時アメリカではワルラスは全く知られていないか，あるいは小粒な経済学者とみなされているにすぎなかったが，シュルツはワルラスの理論をよく知っていた。シュルツを通してジャッフェはワルラスが単なる煩瑣な数学記号に情熱を賭し，風変りな土地の国有化や貨幣改革を提唱した人物ではなかったことを知ったのであり，ジャッフェが1929年にワルラスの『純粋経済学要論』を読み始め，その翻訳の必要を確信してその仕事に着手するようになったのも，シュルツのワルラス経済理論の把握と彼のワルラスに対する情熱によって与えられた刺激の下においてこそなのである。

『要論』について仕事をしているうちに，ジャッフェにはその多くの文節が曖昧なように思われてきたが，その説明のために頼るべきものがワルラスについては，まだほとんど何も公刊されていないことが分かった。ジャッフェはかつてマーシャル『原理』の理解の点でピグー編の『マーシャ

ル記念論集』所収のマーシャル書簡によって助けられたことがあり，そのことからワルラスの書簡を読めば『要論』の理解が容易になるのではないか，と思いついた。当初しばらくはそれがどこにあるのか簡単には見つからなかったが，1934年，遂にローザンヌ大学に膨大なワルラスの書簡と文書が残されていることが発見され，それ以後ジャッフェの一生のほぼあらかたはワルラスの研究に捧げられた。

ジャッフェの公刊された経済学に対する貢献[4]は，①ワルラスに関するものと，②そうでないもの，とに二大別される。ワルラスに関するものとしては，画期的な1935年の「レオン・ワルラスの未公刊の文書と書簡」，1954年刊の『純粋経済学要論』の英訳書，1965年刊の大判大部3巻の『レオン・ワルラスの往復書簡ならびに関連文書集』等々があり，この①の部門がジャッフェの業績のあらかたを構成しているが，その中の（いわば本稿の主題である）ワルラスに関する研究論文については，次節以下で検討するので，ここではワルラス関係以外のものについて一言しておこう。

ワルラス関係以外のジャッフェの執筆公刊物としては，既述のヴェブレン論文やフランスの経済発展に関するもののほか，パレートの英訳に対する書評，学会で発表された他の経済学者の論文に対する討議，数理経済学についてのノート，エッジワースの契約曲線の起源と性格とに関する研究，貨幣と商品との逆循環流（opposite circular flow）という考えの起源についてのノート，等がある。「しかしながら」とウォーカーが述べているように「ワルラスに関する彼の研究こそが，生存中ジャッフェが広く認められて名声を博し，また彼がそれによって記憶されるであろうところのものにほかならない」（[26] p. 1013）のである。

1966年，ノースウエスタン大学を退職したジャッフェは，しばらくのあいだ，いわば放浪の時代を過ごし，1948年に再婚したオリーヴ・カロライン・ウィーヴァー（Olive Caroline Weaver）夫人とともに，カリフォルニア大学リヴァサイド校，ハーヴァード大学，ブリティッシュ・コロンビア大学などで講義していたが，1970年，カナダのヨーク大学から永生教授職を与えられ，彼の生涯は再びその死にいたるまでの非常に生産的な局面にはいった。長年のあいだほとんど認められなかった彼の偉大な業績も，この頃までには世界の経済学界で普く認められるようになってきており，様々な国の様々な機関から種々の名誉称号を与えられた。既述のようにワルラスの『要論』第1分冊公刊100年記念の1974年秋には日本を訪れて，わが国のワルラス研究に大きな刺激を与えた。1980年4月には，アメリカに中心のある国際的な「経済学史学会」（History of Economics Society）が，その最初の「卓越せる学史家」（Distinguished Fellow）の称号をジャッフェに与えた（cf.〔6〕pp. 4—5）。同年の同学会年次大会晩餐会で称号の授与が行なわれた後の（公式の場での彼の最後の発言となった）短い謝辞を，ジャッフェは次のような言葉で結んでいた——「この種の仕事

注（4） ジャッフェの（1984年にウォーカーの編集で公表され『ワルラス伝』の草稿を除く）公刊物のすべては，1981年のウォーカーのジャッフェ追悼論文（ウォーカー〔26〕）末尾の参考文献に掲げられている。

が，みな様が今夕それに与えられたような承認を受けますことを，私は心から嬉しく思います。もしこの麗わしい儀式が他の方々に学究的な歴史的探求・歴史的解釈という険しい困難な道を辿ることにたいする励みを与えることになりますならば，私の努力も十二分に報いられたものと感ずる次第です」（cf.〔7〕p. 20；〔26〕p. 1017）。

彼はその後も仕事を続け，前々から意図して資料を集め，彼の70代の終り頃から執筆し始めていた『ワルラス伝』(5)を書き進めようとした。だが，次第に体力が衰え，同年8月初め，精密検査のためトロントで入院し，癌であることが発見され，8月8日，手術を受けたが，結局もち直すにいたらず，1980年8月17日夜，82歳2カ月余で，おそらく何びともが承認する最大のワルラス学者としての生涯を閉じた。

III　ジャッフェ『ワルラス論集』概観

ウォーカー編のジャッフェ『ワルラス論集』には，ジャッフェが1934年からその没年の80年までのあいだに執筆し，35年から81年までに公表された，彼のワルラスに関する研究論文の実質上すべてとみなしてよい19の論文が（元来フランス語で書かれたものはウォーカーが英訳して）収められている。その収録の仕方は，執筆ないし公刊順ではなく，論文の内容の種類別で，次の5つの部（パート）に分けられている。すなわち，

第Ⅰ部　ワルラスの伝記（2論文）

第Ⅱ部　ワルラスの思想の起源と発展（4論文）

第Ⅲ部　ワルラスの研究（work）範囲（2論文）

第Ⅳ部　ワルラス経済学中の特殊論題（6論文）

第Ⅴ部　経済思想史中におけるワルラスの地位（5論文）

以下に各論文の表題とともに記す元来の公表時からも分かるように，それぞれの部の内部でも論文の配列は主にその内容別で，必ずしも執筆・公表順にはなっていない。このような内容別の編成は，当然，読む上でそれに値いする便利さをもっている。しかしこの分け方は，あくまで便宜上のものであって，ジャッフェのワルラスに関する研究論文を上記のような5種類に分類するとしても，ある特定の論文が，このジャッフェ『ワルラス論集』におけると同一の部の表題下に必ず分類されなければならないという絶対的理由があるわけではない。現にウォーカー自身，ジャッフェ追悼論文〔26〕では，ジャッフェのワルラス研究論文を『ワルラス論集』と同一の5種類に分けながらも，

注（5）　ジャッフェのワルラス伝は，最終的に『レオン・ワルラスの生涯と著作』（*The Life and Writings of Léon Walras*）と表題も決められ，ワルラスの先行者，ことにその父の生涯を扱った第1章と，ワルラスの幼少時と教育を扱った第2章との初稿が書き始められていたが，この膨大な注と参考文献を付した未完の2章の草稿は，ウォーカーによって編集されて，昨1984年春，*History of Political Economy* に掲載された（cf. ジャッフェ〔15〕）。

幾つかの論文についてはそれを本書とは別な項目下に分類している。参考までに各論文末尾の〔 〕内に，ウォーカーのジャッフェ追悼論文での分類では本書のそれとは異なった項目下に入れられているものについては，同論文で分類されている部の番号も付けて，『ワルラス論集』への所収順に所収論文の表題とその元来の公表時を記すと，次の通りである。

第Ⅰ部「ワルラスの伝記」

1．「レオン・ワルラスの未公刊の文書と書簡」(1935年)

2．「失敗した政策勧告者ワルラス」(1975年)

第Ⅱ部「ワルラスの思想の起源と発展」

3．「A. N. イスナール：ワルラス一般均衡モデルの源流」(1969年)

4．「レオン・ワルラスの『要論』の誕生」(1977年)

5．「公刊百年書の公刊二百年書論：ワルラス『要論』のスミス『国富論』論」(1977年)

6．「レオン・ワルラスならびに彼とアメリカ経済学者との関係」(原論文仏文，1960年)〔Ⅰ〕

第Ⅲ部「ワルラスの研究範囲」

7．「レオン・ワルラスと彼の経済学についての考え」(原論文仏文，1956年)〔Ⅰ，Ⅲ〕

8．「レオン・ワルラス」(1968年)〔Ⅰ〕

第Ⅳ部「ワルラス経済学中の特殊論題」

9．「レオン・ワルラスの資本蓄積理論」(1942年)

10．「一般均衡理論の枠組内におけるワルラスの資本形成理論」(原論文仏文，1953年)

11．「古い論争の新しい解明：ウィックスティード『分配法則の整合に関する試論』についてのバローネの未刊書評ならびに関連文書」(1964年)

12．「効用の基数的可測性に関するワルラス＝ポアンカレの往復書簡」(1977年)

13．「ワルラスの模索理論：最近の解釈に対する一批判」(1967年)

14．「レオン・ワルラスの模索理論再考（Anothor look at)」(1981年)

第Ⅴ部「経済思想史中におけるワルラスの地位」

15．「レオン・ワルラスの重要性についての考察」(1971年)

16．「1870年代の“限界革命”におけるレオン・ワルラスの役割」(1972年)

17．「メンガー，ジェヴォンズおよびワルラスの異質性（de-homogenized」(1976年)

18．「ワルラス・モデルの規範的偏向：ワルラス対ゴッセン」(1977年)

19．「他者の眼に映るワルラス経済学」(1980年)〔Ⅳ，Ⅴ〕

既述のように1974年のジャッフェの来日を記念して，わが国では77年に安井・福岡編訳のジャッフェ『ワルラス経済学の誕生』(〔13〕)が刊行されたが，同書にはウォーカー編・ジャッフェ『ワル

ラス論集』所収の上記19論文のうち7論文（第2，第4，第8，第11，第12，第13，第18章）が訳出されており，また第16章が岡田・早坂ほか訳『経済学と限界革命』（[10]）に訳出（福岡正夫・浜田裕一郎訳）されている（ただし製本上の手違いから遺憾ながら文献表脱落）から，ジャッフェのワルラス研究論文のうち，かなりのものはジャッフェの生存中にすでに邦語で利用可能だった。また，わが国におけるワルラス研究は海外に比して驚くほど早く，1933年には手塚寿郎の手になるワルラス『要論』邦訳の上巻（森山書店）が出（ジャッフェの英訳と同年の54年，岩波文庫版でその下巻も刊行），1937年には学生を主対象とした本を媒介として，安井琢磨の，当時利用可能だった資料との関連では驚くほど美事なワルラス伝（[31]）が公刊されている。そして1977年には，大部分がジャッフェの努力によってその後判明したワルラス経済学の形成過程に関する諸事実をも盛り込んだ柏崎利之輔『ワルラス』（[16]）が出たし，今年6月には，非常に多方面の問題に触手を伸ばしながら，にもかかわらず美事なまでに簡にして要を得た根岸隆『ワルラス経済学入門』（[20]）が公刊された。また本誌所収の福岡論文でも，ワルラス経済学それ自体については，形成過程も含めて，重要点のすべてが述べられているはずである。そこで本稿では，ワルラス経済学の概略についてはすでに読者に予備知識があることを前提にし，本節では，ジャッフェのワルラス研究の特徴と，そのジャッフェがワルラスとの関連で述べたことの中で私にとって非常に興味ありまた重要だと思われる一点だけを述べることにし，次いで次節で，彼の『ワルラス論集』所収中の最後に公刊された2論文と係わらせながら，経済学説史家・経済思想史家ジャッフェのみるワルラスと，経済理論家の眼に映るワルラスとの相違を，やや詳細に検討することにしたい。

ジャッフェのワルラス研究の最大の特徴は，伝記を非常に重要視する点にある。ここで伝記というのは，もちろん，研究対象者（いまの場合ワルラス）の家庭の事情の細目等々に関することではなく，その知的面での特性や知的面での経験・発展，そしてその生きた時代の社会的・経済的な諸事件や諸問題を彼がどう捉えていたか，といった類いの事柄である。いかに偉大な高度の一般性をもった理論上の業績といえども，それは特定個人によって創りだされたものであり，その理論・業績にたいして，固有名詞を取り去った，いわば無人称者の所産（そのかぎりにおいて，創りだされたものではなく，単なる存在物）であるかのような仕方で接近することは，決してその理論の真の性格を捉える所以ではない——少なくとも人間や社会に関する理論や学問は，人類史全体との関連でも，また創りだした一個人との関連でも，常にインテレクチュアル・ヒストリーの一環として捉えられなければならない。これが，ジャッフェの固い信念である。この点は，同じく優れた経済学説史家・経済思想史家とはいっても，G. J. スティグラーやM. ブローグらとジャッフェとが決定的に異なる点であり，前二者よりは遙かに伝記にも関心を抱くT. W. ハチスンも，ジャッフェほどまで徹底するにはいたっていない。ジャッフェのワルラス研究論文の内容別分類が必ずしも一義的にはいかないのも，ひとつには彼の論文のほとんどすべてが（上記の意味での）伝記的関心によっ

て貫かれていることに由来している。

もちろん，公表する執筆論文ではほとんど伝記に関心を寄せない人が，個人としても伝記的事実に関心をもたないとはいえないから，スティグラーやブローグ，あるいは次節で取りあげる森嶋通夫らが伝記に無関心だとは言いきれない。ジャッフェ『ワルラス経済学の誕生』の「編訳者まえがき」で「いうまでもないことながら，ジャッフェ教授のワルラスへの接近の仕方は，歴史家のそれであって理論家のそれではない。……両者の志向は根本的にはまったく異なっている」（〔13〕pp. iv-v）と述べ，また誤差なしのワルラス生誕150年たる昨年の福岡との記念対談〔33〕でも，ワルラス理論の（そして一般的には，ある理論の）理解にとっては，ワルラスの（あるいはその理論家の）伝記的事実の知識は全く不必要であるかのような口吻を洩らしている安井琢磨（上記邦訳書の編訳者は安井・福岡の2人だが，「まえがき」の少なくともこの部分は安井筆のはず）にも，既述のように優れた「ワルラス伝」があり，彼（および少なくとも森嶋）が，個人として伝記に無関心とは到底思われない。そしてこれはやや極端な忖度になるのかもしれぬが，伝記に個人的興味を抱くひとほど，かえって理論を扱う際には伝記的問題を突き放したところで，理論を論じようとする傾向をもつのではないか，という気がしないでもない。

ともかく，ジャッフェのワルラス研究はワルラスの（繰り返すが前記の意味での）伝記的事実に対する彼の熱烈な関心と密接不可分な関係にあり，それが彼のワルラス研究を他のワルラス研究家のそれとは異ならせている最大の特徴をなしている。そして，他のワルラス研究家といっても，ジャッフェほどワルラスのみにほぼ集中した研究家は稀有であり，ジャッフェがそのように稀有のワルラス研究家たりえたのも，ワルラスへの伝記的関心がありえたからこそ（ただし，言うまでもなく，逆は必ずしも真ならず）のはずなのである。だがこの点は，次節で，具体例に即してもう少し詳論することにしたい。

ジャッフェがワルラス研究論文で述べていることの中で，これまであまり注目されていないが，私には非常に重要だと思われるのは，編訳書『ワルラス経済学の誕生』にも（丸山徹訳が）収められている「古い論争の新しい解明」中の次の発言である。スティグラーの1941年の名著（〔24〕）によっても十分明らかにされなかった限界生産力説の展開過程の一側面に光を投ずることを中心テーマとする，1964年に公表されたこの論文自体の重要性については今さら喋々する必要もないはずであり，邦訳もあるのでその中心的論旨は同論文それ自体に譲り，ここで言及しておきたいのは——私自身かつてすでに述べた（cf.〔4〕pp. 28—9）ことではあるが——次の点である。

限界生産力説はしばしば（わが国でいわゆる）近代経済学の分配理論とされており(6)，近代経済学者のあいだではむしろそれが通説といってよいのかもしれない。しかし，限界生産力説は本質的に

注（6） たとえば P. A. Samuelson & William D. Nordhaus, *Economics*, 12th ed. McGraw-Hill Book Company, 1985, Part Five Chapter 26, 参照。

は企業の生産要素の需要理論だし，また何よりもそれは短期の静学理論であって，古典派が問題にしたような社会的生産物の社会諸階級（ないし諸グループ）間での時間を通じての分配関係の動向を問題にする動態的理論とは，その性格をはっきりと異にしているはずである。そしてジャッフェも，「古い論争の新しい解明」の末尾で，大略次のように述べて，そのことをはっきりと認めているのである。すなわち——

限界生産力説をめぐるワルラスとウィックスティードの論争には，奇妙なパラドックスがひそんでいる。ワルラスもウィックスティードも，その分析的議論では「リカードウが考えていたような意味での“分配”問題……には真に携るところがなかったからである」。たしかにウィックスティードは『分配法則の整合』（1894年）の初めでは，リカードウ流の分配問題について若干の筆を割いている。「だが，彼の議論はただちに『整合』の主たる関心事，すなわち限界生産力説を採った場合における生産物の完全分配の問題に移ってしまっている。そして『整合』の最後に近い部分では，厳密な形態における限界生産力説は“分配法則ではな〔い〕……”ことを十分に認めて」おり，「二つの問題を結合しようという，彼の漠然とした試みは説得力のない形のままとなって残されている」。一方『純粋経済要論』におけるワルラスも，「固有の“分配”問題にはまったく無縁であった」。『要論』決定版は「“分配”という言葉あるいはそれに関連をもつ同義語を含んでいないのである。『要論』決定版のうち，地代，賃金および利子を扱った第39章，第40章も，この問題に関する古典派理論の批判的再検討にすぎないものといってよく，またそれ以外の装いを身にまとうものでもなかった。『要論』から分配問題がとり除かれたことは，経済理論に関する初期諸論作の慣行からの画然たる離別を示すばかりでなく」（傍点早坂），ヒックスが『価値と資本』で，またサミュエルソンが『経済分析の基礎』で「踏襲した先例を築く」ことになった。「これらの著作のなかには分配に関する章節は一つたりとも見出すことはできないのである」。

「しかしながら，これらのことから，ワルラスが固有の意味での分配問題について無知，無感覚であったと考えてはならないであろう」。ワルラスは「富の分配」が「まったく人間制度の問題」で「物理的真理の特徴を帯びる」生産とはその法則を異にすると考えたJ．S．ミル(7)と「同じ精神で，分配問題が社会的，倫理的な問題であり，たんに分析的なエンジンのクランクを回すだけで，その解決策が捻出されるものではないと考えていたのである。ワルラスのこのような姿勢は，“社会的富の分配理論”という意味深長な副題を付されて1896年に上梓された，社会哲学問題に関する論文

注（7） ただしミルも，いったんある社会制度が与えられたうえでは，分配法則もその社会のなかでは生産法則のように物理的真理に近い確定性をもつことをもはっきり認めているが（この点については，早坂「J．S．ミルの『経済学原理』第四篇をめぐって」東大教養学部『社会科学紀要』第14輯，1964年，第2節，132ページ以下，を参照されたい），しかし，その与えられた社会——ミルが直接の考察対象としているのは，言うまでもなく（今日の用語でいえば）資本主義社会——の内部での分配問題の取扱い方も，そうとることを完全に拒斥しているわけではないにせよ，明示的に限界生産力説的な形をとっているものではない。

集『社会経済学研究』においても明確に窺い知ることができる」。「ワルラスにとって限界生産力説なるものは，本質的には彼の“生産”理論の修正，すなわち当初は固定生産係数の仮定の下で定式化され，やがて可変係数を含むように一般化された，生産用役の価格決定理論以外の何ものでもなかったのである」と（cf. ジャッフェ〔14〕pp. 210—12，ジャッフェ（安井・福岡訳）〔13〕pp. 145—48)。

経済学における分配問題の性格を考えるうえでも，このジャッフェの発言は非常な重要性をもっていると思われるが，ここではジャッフェが以上のような発言をしているという事実を確認するに留めなければならない。

Ⅳ　思想史家・学説史家と理論家

『純粋経済学要論』（以下『要論』と略記）は，通常，ワルラスの主著と考えられているし，また同書は，それが彼の体系化した形で書き残した唯一の著書だという意味では，おそらく誰の目からみても十分そうみなされるに値いする。その『要論』は，公刊以来，どのように論じられ，また同書のどの側面がとくに問題にされてきたのか。いかに興味ある問題にせよ，その全体を論じることは本稿の課題ではないし，またスペースもない。そこで過去30年くらいに視野を絞り，その間今日にいたるまで『要論』について最も論じられることの多かった点にかぎれば，多分，模索の理論，第Ⅴ編「資本化および信用の理論」に登場する「新資本」の解釈，『要論』で展開されている経済理論の性格（あるいはワルラス経済学全体系の中での『要論』の位置），などが少なくともそれに該当するものとしてあげられるであろう。そしてこのすべての点でジャッフェは，最近の他の諸論者と多かれ少なかれ見解を異にし，ジャッフェ自身もそのことをはっきりと意識して，『ワルラス論集』所収中の最後に書かれた2論文（1980年公表の第19章および死後の1981年に公表された第14章）は，その点での自己の見解を，他者，ことに森嶋通夫の見解との対比で明らかにすることに当てられている。本節ではこの最後の2論文を中心に，上記の諸論点に対する彼の解釈を通して，ジャッフェのワルラス論の特徴をもう少し立ち入って検討しておくことにしたい。そのためには先ず，森嶋の1977年の著書『ワルラスの経済学』（〔17〕）の特徴を，ごく手短かにせよ，述べておかなければならない。

周知のようにワルラスの元来の構想では，彼の経済学は純粋経済学，応用経済学，社会経済学の3部門から構成され，正義の原則に基づいて行なわれる公正な分配のための条件を明らかにする社会経済学が最上位に位置し，前2者は，その最終目的に到達するための基礎工事という意味で，予備的ないし準備的理論と考えられていた。しかし前掲書の森嶋は，結局体系化されず論文集という形で公刊されるに留まった『応用経済学研究』（1898年），『社会経済学研究』（1896年）を考慮することなく，『要論』のみに視野を限定しても「ワルラスについて歪んだ見方をすることにはならないだろう」（Morishima〔17〕p. vii）と考え，『要論』のみを対象にしたうえで，従来無視ないし非常に軽

視されていた第Ⅶ編「経済的発展の条件と結果」を同書の中核とみなし，ワルラスを「マルクスに比肩しうる，そしてケインズを予見（anticipate）した経済学者」（p. viii）として捉える，非常に独自なワルラス解釈を提示した。森嶋にそのような解釈をとらせた要因は広狭――というのは彼の経済学ないし経済学史の捉え方全体との関連や，ワルラスないし『要論』の捉え方との関連，等々で――様々のはずである。だが，『要論』だけにかぎっていえば，おそらく，同書第Ⅴ編「資本化～」中の「新資本」を現実の実物資本の純増加と解する点に最大の要因があるといってよいであろう。また森嶋は――この点では（『要論』におけるワルラス理論を成長モデルとして捉えるか静態モデルとして捉えるかという点を別にすれば），今日の大多数者のワルラス解釈と同様に――『要論』の究極的目的は，それによって現実の資本主義経済の運行の仕方を検討しうるモデルを構築することにあった，と考えている。

ジャッフェは以上のすべての点で森嶋のワルラス解釈に反対であり，前記2論文，およびそれ以前に発表された森嶋書の書評論文（ジャッフェ〔12〕）で，自己の見解を克明に展開した。ただし注意を要するのは，次の点，すなわち，ジャッフェが森嶋に反対するのは，ワルラスそれ自体に対する森嶋の読み方ないし解釈に関してであって，森嶋（ないし他の最近の理論家）が彼（ないし彼ら）の解した意味での「ワルラス的理論（Walras-like theories）」（ジャッフェ〔14〕p. 244）の発展ないし修正として提示した理論の方が，元来のワルラス理論よりも大抵の場合優れているということについては，ジャッフェもそれを承認するに吝かでないことである。しかし，ある誰かの理論を手懸りにしてそれを論者独自の考えによって修正発展させて（多くの点で）より優れた理論を構築することと，その新たないっそう発展させられた理論を元来の理論家が真に意図したことのより十全的発現であると主張することとは，二つの全く異なったことであり，経済思想史家ジャッフェにとっては，原著者（ここで直接的にはワルラス）の真意やそのテキストの恣意的解釈は，その結果生まれるものが如何に優れていようとも，自己の専門（craft）の観点からは到底看過するに耐えないのである。(8)

さて先にあげた論点についての森嶋解釈に対するジャッフェの反論は相互に関連し合っているが，便宜上先ずそれぞれを切り離して簡単に述べると，――*tâtonnement* については，森嶋はそれを，如何に抽象的かつ（ある意味で）譬喩的形で述べられているにせよ，現実に起こる，現実の時間の

注（8） ここで，ジャッフェのそのような考えを端的に示している2つの印象的な言葉を原文のまま引用しておくことにしたい。

"The principle of historical integrity is too dear to the heart of a practiced historian to allow textual misinterpretations (his own included) to pass unnoticed". ([14] p. 244)

"It is because our contemporary critics of Walras, our Patinkins, our Kuennes, our Garegnanis, our Morishimas, proceed blissfully unmindful of Walras's primary aim in creating his general equilibrium model that I suspect they misunderstand it and subject it to reformulations, emendations, and corrections that are beside the point――I mean, of course, the point the historian of economics is obliged by his craft to make". ([14] p. 367)

経過を伴う過程と考え，それを，とくに計量経済学的観点からはより優れた，時差を含む数式的形に再定式化しているが，これはワルラスの真意の完全な誤解だ，とジャッフェは主張する。たしかに版を重ねるにつれて『要論』におけるワルラスの tâtonnement の説明は細かな点で微妙な変化をみせており，森嶋（その他現在の多くの理論家）の解釈を支持するような発言が最終版まで残っていることも事実である。しかし，ジャッフェは，『要論』各版の文言の詳細な検討（ワルラス自身の逆の発言にもかかわらぬ，後の版での初版との微妙な表現の変更の指摘をも含む）を通して，1981年論文では，ワルラスの tâtonnement に対する当時の支配的な経験的解釈を批判した1967年論文（『ワルラス論集』第13章）での発言，すなわち「この〔模索の〕理論を組み立てるさいにワルラスの頭のなかにあった目論見（underlying motive）は，一般均衡の抽象的な数学モデルが逐次複雑化していく各過程で，そのモデルに経験的妥当性の息吹き（an air of empirical relevance）を与えようとするところにあった」[(9)]（ジャッフェ〔14〕pp. 223, 246：ジャッフェ著，安井・福岡編訳〔13〕pp. 174—75）すら，やや表現が強すぎており，1977年の論文「ワルラス・モデルの規範的偏向」（『ワルラス論集』第18章：安井・福岡編訳書に邦訳所収）で詳論された「ワルラスのモデルに暗黙裡に含まれている“規範的偏向”に照らしてみれば，ワルラスの tâtonnement 理論の背後にある目的は，経験的事実を描きだすことよりむしろ，経験的にも可能性をもっているもの（empirical possibility），ないし実現可能性を伴っているところの存在することが望ましいもの（feasible desideratum）を描きだすことであった，と考える方に，現在の私はより傾いている」（〔14〕p. 246）とまで述べるにいたっているのである。

『要論』第Ⅴ編「資本化～」に登場する「新資本」によって森嶋が，そこでは実物資本が現実に増加する成長の問題が考えられているのだと解していることはすでに述べた。それに対してジャッフェは，第Ⅴ編でワルラスが問題にしているのは資本形成の決意（decision）のみ，ないし（土地資本や人的資本を除いた）固有の資本の価格決定の問題のみであって，その資本形成の決意の結果として，その後に生ずるところの現実の資本増加はそこでの問題の範囲外なのであり，ワルラス自身述べているように第Ⅴ編の段階でも資本のストックは不変，つまり静学の枠組が守られているのだとする。また新資本を現実の資本の増加と解することとも関係して，森嶋は，『要論』では労働者，地主，資本家，企業家という社会の4階級構成が考えられており，企業家の役割の重視という点も含めて，このワルラスの社会の4階級構成論はマルクスの2階級構成論よりも優れているとしている（cf. Morishima〔17〕Introduction）。しかしジャッフェはこれにも強く反対し，ワルラスの本質的社会把握は2階級構成論であり，しかもその2階級はマルクスのそれとは全く異なった，

注（9） このジャッフェからの引用文は邦訳〔13〕のそれを（この部分だけを引く必要上生じた〔 〕内の補いと，原語の挿入とを除いて）そのままとったが，1981年論文でのジャッフェの発言に照らせばなおさらそうだが，1967年論文だけを読んでも同論文全体でジャッフェが述べていることの趣旨に照らせば，原語を挿入した2番目の部分は，「経験界で起こる事柄とも関係があるという外観」くらいに訳す方が原意に忠実なのではなかろうか。

一方における土地所有者ならびに自然的独占の所有者と，他方における，企業家や資本家をも含んだ社会の残余の人々全体という，ワルラスの父を始め当時のフランスの有識者たちが（あるいはもっと遡れば重農主義者以来）主としてそれとの関連で「社会問題」を考えたフランス人の意識に特有な階級構成なのであり，また『要論』中に登場する企業家は，いったん均衡が成立すれば「利潤」とともに画面から消滅してしまう，いわば資本形成機能の擬人化としてのそれであって，まだ貨幣が登場せず一切の経済行動がニュメレールを媒介にして行なわれている第Ⅴ編に登場する企業家をもって，貨幣あるいは現実の貨幣によって媒介された信用によって資本形成行為を行なう現実の企業家と事実上同一視するのは，ワルラスの意図からは全く離れたことだ，と反論する（cf.〔14〕第19章）。

以上のようなわけで（ここでは触れえぬ他の諸論点も含めて）結局2人のあいだの見解の相違の取り敢えず最大の淵源は，全7編から構成されている『要論』の「中核」（kernel）をどこに求めるか，換言すれば，第Ⅵ編「流通および貨幣の理論」までと，第Ⅶ編「経済的発展の条件と結果～」，第Ⅷ編「公定価格，～」との関係をどう考えるか，に帰着する。この点については，これまでの簡単な叙述からも容易に推察がつくように，森嶋は両者を連続と捉え，たとえページ数上は短いにせよ第Ⅶ編をもって『要論』の中核とし，それ以前は全てそこに到るための準備であり，その準備段階ですでに予備的事項の説明はあらかた為されているのだから中核たる第Ⅶ編は簡潔な叙述ですむのだ，と主張する（cf.〔17〕Introduction）。これに対してジャッフェは，第Ⅵ編までが中核だとし，「森嶋がどう言おうとも，『要論』の第Ⅶ・第Ⅷ編はワルラスの一般均衡体系（エディフィス インテグラル）の不可欠な部分と考えられることを意図されたものではなかった。その〔第Ⅶ・第Ⅷ編の〕結尾部（コーダ）は，むしろ，彼の純粋静態（スタティカル）理論と，本質上動態的（intrinsically dynamic）である彼の応用ならびに“社会”理論とのあいだのリンクとして役立つように意図されていたのである」（〔14〕p. 367）として，強くその森嶋論に反対している。

この2人の対立する主張のどちらかに軍配をあげること自体は，ここの課題ではない。（ただし，ごく大まかにいうかぎり，『要論』の中核を第Ⅵ編までとし，その中核を基本的には静態ないし静学理論として捉える点ではジャッフェに賛成だが，しかしその中核部分の目的は現実を説明することにある，換言すれば，いかに抽象的にせよ実証的（ポジティヴ）理論ないしモデルの建設にある，とする点では，森嶋説と同意見だ，というのが，今日のワルラス解釈の大勢とみてよいであろう。）

本稿で注目したいのは，以上のようなジャッフェの森嶋批判ないしワルラス解釈は，『応用経済学研究』や『社会経済学研究』，その書簡，ひいては初期の小説『フランシス・ソーヴール』（*Francis Sauveur*）をも含めたワルラスの全執筆物への考慮に基づく，ジャッフェの「ワルラス・モデルの規範的偏向」という考えによって最終的に支えられていること，しかもジャッフェにこのよう

な考えが登場するのは，彼の長いワルラス研究史でもかなり後の段階になってからのことなのだ，という点である。

ワルラス全経済学体系が純粋経済学，応用経済学，社会経済学の3部門から成ること，このことはワルラス自身『要論』初版第1分冊（1874年）の巻頭で明言（1902年の第4版序にも転載）しており，何びとも認めるところである。しかし，その第1部門を扱っている『要論』でワルラスが真に意図したことが何なのかは『要論』だけからでは明らかでなく，その点を明らかにするためには，ワルラスの全著作や彼が生きていた時代の「時代精神」（Zeitgeist）を探らなければならないのだ，とジャッフェは主張する（cf. [14] p. 347)。ワルラスは1860年刊行の経済学上の処女作『経済学と正義』（*L'économie politique et la justice*）から最晩年1909年の彼の研究の回顧論文（[30]）にいたるまで，常に社会的正義の問題を解決すべき最大の問題として意識し，彼の経済学上の全著作はその問題との関わりの中で展開されている。『純粋経済学要論』だけを読むと，それは価値判断から自由な実証的理論を展開したもののように映りかねないが，それは決してそうではない。『要論』の第4節や第223節で宣言されている純粋経済学と規範的考察とのあいだの無関係性も，第Ⅰ編や第223節の全文脈の中で読めば，それは単に財産の分配に内在的な「分配の正義」の問題とのみの無関係の主張なのであって，市場交易のいかなる特定の組織にも潜在している「交換の正義」（commutative justice）とまでの無関係性が主張されているのではないことが明らかになる。だが「交換の正義」と「分配の正義」は別個に取り扱われなければならず，社会的正義の問題と明示的に関わらせて論じられなければならぬ「分配の正義」は，『社会経済学研究』における独立の論議を必要としている。しかし，一見実証的と映る『要論』の論議も，実は決してそうなのではない。それは「"交換の正義"の観点からする正しい経済の理論的表現（theoretical representation of a just economy）として計画されたものなのである」。ジャッフェは，このように主張する（以上，cf. [14] p. 348, ibid. n 11)。したがって『要論』の所説中にも規範的価値判断が陰伏的に内在しているのだが，にもかかわらず同書が一見価値判断から自由な実証的理論であるかのような外観を呈して提示されているのは，当時のナポレオン三世治下のフランス第三帝国による反体制思想の弾圧をワルラスが恐れたからなのだが，同書の真の性格が以上のようなものである以上，表面の実証的性格の背後にある交換面での正義の抽象的・理論的表現という，その価値判断の側面からも同書に接近しないかぎり，同書の所論の正しい把握は不可能である。森嶋（例えば）は第Ⅴ編「資本化～」における「新資本」を実物の資本増加と解しているが，それは，そこでの基本的観点が「交換の正義」（傍点早坂）つまり資本形成の意思決定であり，分配問題がはいってくるところの資本形成が実際に行なわれて現実に資本が増加する，上記の意思決定の結果生じる新たな事態ではないことを見落しているからである。経済の現実の変化・動態面を，分配の正義の問題と明示的に関わらせて取り扱う社会経済学において展開されるところのより高次の後続部分との連結環として添えられている

『要論』の第Ⅶ・第Ⅷ編を森嶋が同書の最重要な本質的部分とみなすのも，彼がワルラス全体系中での『要論』の位置を誤解していることからきているのだ――ジャッフェは，こう主張するのである。森嶋（〔18〕）は，これら諸点に関するジャッフェの自己への批判に対して真向うから反論したが，ほとんど論拠をあげていないので，そのかぎりではジャッフェ対森嶋論争は平行線に終った。

詳論したという意味では，1977年の論文「ワルラス・モデルの規範的偏向」から始まるジャッフェのこの主張は，ウォーカーが述べているように（cf.〔29〕p. 445），経済学者の発言と規範問題の関わりの指摘としても，従来あまりみられなかった質的特異性をもっている。通常その点の指摘は，当事者が意図も意識もしなかったにもかかわらず無意識的価値判断が多少ともひそかにはいり込んでおり，そのために云々，という形をとるのだが，ジャッフェのこの論文では，『要論』のワルラスは意図的に価値判断を導入し，しかも，環境的制約上，意図的にそれを可能なかぎりそうでないかのように見せかけようとした，と主張されているのだからである。ウォーカーは，1984年論文（〔29〕）でジャッフェのこの主張を詳細に検討し，ワルラスの『要論』各版その他での諸発言から判断しても，また当時の第三帝国の検閲面での実際の圧力（ことにローザンヌにいたワルラスに対して，ありうべきそれ）から判断しても，『要論』に無意識裡の価値判断が潜在しているか否かはさて措き，ワルラスが意図的に価値判断を導入し，しかもそれを隠蔽しようとしたという点に関するかぎりジャッフェの主張は到底支持しがたいとしている。膨大な原資料に直接当ることなく，ジャッフェとウォーカーとの論文での所説(そして，そこで引かれているかなりに多くの資料)から判断するかぎり，「意図的に」云々の点に関するかぎり，ウォーカー説の方にはるかに分があると私は考えざるをえない。また，たとえこのウォーカー論文を読まなくとも，多くの人はジャッフェの1977年論文の所説や，その後のジャッフェのその所説を直接的に前提としたかぎりでの発言の多くに，やや，あるいはかなり，首を傾けるのではなかろうか。

だが，残念ながらともいえるし，幸いにもともいえるが，話がそこで終るのではない。ジャッフェは，最終的には，社会的正義問題への関心の貫徹というワルラス全体系に対する彼の捉え方との関連で森嶋(そして他の多くの現在の理論家)のワルラス解釈の様々な側面を批判した。しかし，ワルラス・モデルの規範的偏向というジャッフェのワルラス観に対しては批判的な理論家，学史（ないし思想史）家の多くも，『要論』の第Ⅶ編をもってその中核とし，『要論』の理論をマルクスやケインズと接続させようとする森嶋説には，少なくともワルラス解釈としては反対である。先に学説史家の観点と理論家の観点とを峻別する安井の意見に触れたが，上記のことを考えると，学説史家は概して相互にほぼ一致した見方をもち，理論家は理論家でこれまた概してほぼ一致した解釈をとり，その上で両グループのあいだに見解の相違が発生する――安井説は，真意はともかく，ややもするとそうとられかねないが――というわけのものではないということになる。学史家であれ理論家であれ各人は個性差をもつから，それは当然のことだ，といってしまえばそれまでだが，でき

ればそこには，単なる学史家・思想史家と理論家との区別や個性差を越えた，そしてワルラスとの関連でいえば，ワルラス経済学の性格とも関連する，何らかもう少し立ち入った，より納得のいく説明（というか説明らしい説明）が与えられることが望ましい。

またワルラスだけに関していえば，単一の『要論』の同一の版だけをとっても，部分部分での発言は場所によってはかなり曖昧であり，かつ相互に矛盾することがあるし，異なる版を対比すれば，いっそう然りである。とすれば，いかにワルラス研究の第一人者，ことにその全著作や書簡にまでわたるテキスト・クリティークや伝記的研究面での第一人者ジャッフェの説とはいえ，ワルラスの業績の一切は「社会的正義」に対する彼の強い関心によって終始貫かれていた，とまでいってしまってよいかにも，かなり疑問が生じてくる。ことにジャッフェのそのような考えが1977年（直ぐ述べるようにその起源は1973年に遡る）になってから生まれたものであり，それ以前の彼は，今日のほぼ通説といってよい『要論』の理論をもって経済の現実の動きを説明する実証的理論とみなす立場をほぼ一貫してとっていたとすれば（ウォーカー，1984年論文〔29〕参照），いっそうその感が深い。はたしてジャッフェはこの点でも正しいのか。またこの点でのジャッフェ説の妥当性の程度がどうであれ，なぜワルラスは同一版でもそこここで曖昧だったり相互に矛盾する発言をし，また版が異なると幾つかの個処で発言が微妙に変ってくるのか。

以上の諸点は，何れも私にとっては説明を要する興味ある問題である。だがここでは，紙幅上，ジャッフェの『ワルラス論集』という本稿のテーマと直接的に関係する次の一点だけについて，私の臆説を簡単に述べておくことにしたい。『要論』の性格に関するジャッフェの解釈が，なぜ1973～77年ごろに変ったのかについてである。

ジャッフェのワルラス研究がワルラスの伝記に対する彼の強い関心によって貫かれていることは，すでに何度か繰り返した。かなりに体系的かつ独創的な理論の理解のためにはその理論の建設者の伝記的事実の研究が不可欠だというのが，徐々にはぐくまれ強化されていったものにせよ，ジャッフェのワルラス研究を貫く信念的大前提だが，彼のこの信念に対しては，1973年，正面切ったジャッフェ批判という形でではないが，トロントでのミル父子記念国際会議（5月3日～5日）におけるスティグラーの論文「科学的伝記の科学的利用」（〔25〕）によって，強烈な反論が加えられた。J.S.ミルを例としたこのスティグラー論文の一般的側面での所論を一言でいうと，科学的理論の理解にとって伝記的事実についての知識は，その理論の進展過程や，科学活動の歴史ないし科学の社会学に関する知識に原理上投じうるごく僅かな光を除いて，何の役にもたたないというにある。もちろんこのスティグラー説は，伝記面の研究に多大の精力を傾注し，そこからワルラスの解明に多くの光を投じてきたジャッフェにとって，到底受けいれがたいものだった。ジャッフェは，同年5月24日，スティグラーに反論する未刊のタイプ論文（〔9〕）をつくるとともに，1974年12月30日，サンフランシスコで開催されたＡＥＡ（アメリカ経済学会）とＨＥＳ（経済学史学会）共催の会議で，

スティグラーへの反論論文（ジャッフェ〔11〕）を朗読した。ワルラスの書簡や彼の未刊文書を研究してみるとワルラス理論には規範的偏向があることが分かる，という1977年論文（〔14〕第18章）で詳細に展開された考えをジャッフェが初めて公けにしたのは，この席（ないしそこで読まれたミメオグラフ〔11〕）においてである。スティグラーとジャッフェのあいだで闘わされた伝記と経済思想史研究とのあいだの関係についても，ウォーカーの（やや無味乾燥で分類学的にすぎ，若干トートロジカルな感がしないでもないものにせよ）ほぼ妥当でかなり行届いた整理論文（〔28〕）がある。いまウォーカー論文に立ち入る余裕はないが，ジャッフェとの関係で注目したいのは，彼のワルラス理論の規範的偏向説がスティグラーへの反論のなかで初めて提出されたという事実である。ひとは他人を反駁するときは，とかく意見が過激になりがちである。前々から薄々感じていたことでも，他人への反論として提示する際には，それをある程度整理した形にしなければならない。そして簡単にもせよ，何らかの考えをいったん公けにしてしまえば，通常，それをより整理敷衍した多少とも体系的な形で再提出する必要に迫られがちなものである。また当面の問題との関わりでは，当時すでに70歳代も半ばに達していたジャッフェの年齢のことも考えなければならないであろう。これまたあくまで通常の話だが，ひとは老齢が進むにつれて，多くの面で円熟味を加え温厚さを増していくとともに，その反面，ある面での頑さを強めていくものである。1977年論文で詳細明示的に展開され，彼の森嶋批判の最終的論拠ともなったジャッフェのワルラス理論の規範的偏向説は，このような過程で，かなり一方的に強められていったのではなかろうか。ジャッフェが社会的正義の問題に強い関心を寄せていたことは事実にせよ，ひとは常に単一の動機のみに基づき，多方面にわたる自己の仕事の通時的・同時的首尾一貫性に終始細心の注意を払いつつ考えたり，語ったり，執筆したりするものではない。ワルラス解釈としての森嶋説に対する批判をジャッフェのような形で展開することは，難攻不落でもあるが，同時に決め手のない攻めロであり，むしろ『要論』各版中の諸発言を中心に据えた批判の方が，少なくとも他人に対しては，より説得性をもつのではなかろうか。

もとより以上のようにいうことは，ジャッフェの説は索強附会だとか，ジャッフェは自説の無謬性の信者だった，とかいうことを意味したいのではない。ウォーカーによれば，ジャッフェは単に宗教面だけでなく，知識面でも，絶対的正しさとの関連では，不可知論者だった（cf.〔27〕p. 35）。また「ジャッフェは，各世代は先行者の仕事の中に新たな興味ある事柄を発見し，過去を新たな光に照らして読むものだということをはっきりと意識していたので，彼が自己の扱ったすべての問題に確定的解答を与えたなどとはおよそ言わぬはずの人だった」（〔14〕p. 14，ウォーカーの序論中の言葉）。ジャッフェについてのこのウォーカー説は，ジャッフェの（例えば）ワルラス tâtonnement 論に関する以前の自説の事実面での誤りの訂正（cf.〔14〕p. 247）や，その解釈面での自己の前説の修正（cf.〔14〕第13，第14章）からも十分首肯しうるところである。にもかかわらず，伝記研究の重要性は十分承認しながらも，私には，スティグラーの思想史研究における伝記研究の意義のほぼ全面的否

定説に逢着して，以後のジャッフェは，他の諸貢献と並行しつつも，ワルラス理論の規範的偏向説をやや過大視し，それに執着しすぎたのではないか，という気がされてならないのである。

V　結びに代えて

日本におけるワルラス研究[(10)]にもやや立ち入って触れ，ジャッフェのそれとの対比なども試みたかったのだが，もう紙幅が許さない。すでに少し述べたように，一言でいうと，わが国のワルラス研究史は欧米に比して驚くべく早く，ジャッフェと比較しても（ジャッフェは1人，日本は，戦前にかぎっても，たとえそう多くはないにせよ，やはり何人か，というように，ジャッフェにはやや不当な比較だが）時間の長さおよび理論面の研究では決して遜色なく，むしろより立ち入っている面も少なくない。しかし，ワルラスの経済学が3部からなること，そして『応用経済学研究』，『社会経済学研究』についても1937年の安井のワルラス伝ですでに触れられているし，戦後にはワルラス体系の全体を概観した1968年の岡田純一論文（〔21〕）や，ことにワルラスの社会経済学に関する67年の立半雄彦の一連の研究論文（〔22〕）があるけれども，わが国における研究の重心は圧倒的に『要論』，そしてその理論面に傾いている。ワルラスの後世への影響という点からすれば，これは当然といえば当然のことである。しかし，理論もまた個性ある生身の人間の所産であり，その個人の生きた文化圏の「時代精神」の所産なのであって，この面を重視するジャッフェのワルラス研究と日本におけるそれとは，この点で著しい対照をなしている。そして異なった時代の異なった文化圏で経済理論を創りあげたワルラスの伝記的・思想的側面を理解することは，われわれ日本人にとってはジャッフェにとって以上に遙かに困難なことだが，しかしそれだけにまたその面にもジャッフェ以上の関心を寄せようとしないかぎり，そしてワルラスにかぎらず，他の外国の経済学者についても同様のことがなされないかぎり，わが国の経済学は，いぜんとしてその感が強い多分に根無し草の状態から容易に脱却しえないのではないか。

ワルラス研究家としてのジャッフェの偉大な業績は，彼のワルラスの伝記への関心と密接不可分なのだが，にもかかわらず，そのワルラスの伝記面への関心が，かえって晩年のジャッフェのワルラス観にある種のバイアスをもたらしているように思われたこととともに，しかしそれにも遙かに増して，前々からもっていた，いま記したような考えがいっそう強められた，というのが，今回あらためてジャッフェ『ワルラス論集』でジャッフェのワルラス研究論文を通読したうえでの私の偽らぬ感想である。

注（10）本稿で触れえなかった日本におけるワルラス研究については，ごく簡単には早坂〔5〕pp. 155—61を，やや詳しくは早坂〔3〕，および安井〔32〕の（目次から大体見当がつく）該当個所を参照されたい。

〔文 献 表〕

〔1〕 Collard, D., "Book Review of Walker ed., *William Jaffé's Essays on Walras*," (*History of Political Economy*, Vol. 17, No. 2, Summer 1985).

〔2〕 Hayasaka, T., "Walras and Marshall——mainly on their personal relations——", unpublished typescript, (Oct. 29) 1974（事実上，早坂「マーシャルとワルラスとの関係についての一覚書」〔東大教養学部『社会科学紀要』16，1967年3月，所収〕の英訳)。

〔3〕 早坂忠「日本経済学史の諸断面」(3)～(9)，(『経済セミナー』1971年12月号～72年6月号，所収)。

〔4〕 ————，「エコノミクスとポリティカル・エコノミー——名称の変化と実質の変化——」(東大教養学部『外国語科研究紀要』第25巻第5号，1978年3月，所収)。

〔5〕 ————，「戦時期の経済学」(経済学史学会編『日本の経済学——日本人の経済的思惟の軌跡——』東洋経済新報社，1984年，所収)。

〔6〕 History of Economics Society, *HES Bulletin*, Vol. I, Issue 3, Winter 1980.

〔7〕 ————, *HES Bulletin*, Vol. II, Issue 2, Summer 1980.

〔8〕 Jaffé, William, *Les théories économiques et sociales de Thorstein Veblen*, Giard et Brière, 1924.

〔9〕 ————, "Notes on George Stigler's Paper, 'The Scientific Uses of Scientific Biography, with Special Reference to J. S. Mill'", unpublished typescript, (May 24) 1973.

〔10〕 ————, "Léon Walras's Role in the 'Marginal Revolution' of the 1870s," originally in *History of Political Economy*, 4, Fall 1972 : now both in R. D. Collison Black et al. (eds.), *The Marginal Revolution in Economics*, Duke University Press, 1973〔岡田・早坂ほか訳『経済学と限界革命』日本経済新聞社，1975年〕; and in Jaffé 〔14〕.

〔11〕 ————, "Biography, a Jenetic Ingredient of Economic Analysis. Answer to a Challenge", mimeographed paper, delivered at the Allied Social Science Association meetings, under the joint auspices of the American Economic Association and the History of Economics Society, San Francisco, (December 30) 1974.

〔12〕 ————, "Book review of *Walras' Economics; A Pure Theory of Capital and Money*", (*Economic Journal*, Sept. 1978).

〔13〕 ジャッフェ著，安井琢磨・福岡正夫編訳『ワルラス経済学の誕生』日本経済新聞社，1977年。

〔14〕 ————, *William Jaffé's Essays on Walras*, edited by Donald A. Walker, Cambridge University Press, 1983.

〔15〕 ————, "The Antecedents and Early Life of Léon Walras", edited by Donald A. Walker, (*History of Political Economy*, Vol. 16, No.1, Spring 1984).

〔16〕 柏崎利之輔『ワルラス』，経済学者と現代⑥，日本経済新聞社，1977年。

〔17〕 Morishima, Michio, *Walras' Economics; A Pure Theory of Capital and Money*, Cambridge University Press, 1977（森嶋通夫著，西村和雄訳『ワルラスの経済学』東洋経済新報社，1983年)。

〔18〕 ————, "W. Jaffé on Walras: A Comment", (*Journal of Economic Literature*, 18, June 1980).

〔19〕 根岸隆，「書評：森嶋『ワルラスの経済学』」(一橋大経済研究所『経済研究』，Vol. 31, No.1, 1980年，所収)。

〔20〕 ————，『ワルラス経済学入門——「純粋経済学要論」を読む——』岩波セミナーブックス15，岩波書店，1985年。

〔21〕 岡田純一「レオン・ワルラス経済学体系論」(『思想』1969年12月号，所収。現在，岡田『フランス経済学研究』御茶の水書房，1982年，所収)。

〔22〕 立半雄彦「L．ワルラスの社会経済学」㈠㈡㈢(大阪府立大『経済研究』49，50，51号，1967年，所収)。

〔23〕 Samuels, W. J. (ed.), *The Craft of the Historian of Economic Thought,* Research in the History of Economic Thought and Methodology: A Research Annual, Vol. 1, JAI Press, 1983.

〔24〕 Stigler, G. J., *Production and Distribution Theories,* Macmillan, 1941.

〔25〕 ————, "The Scientific Uses of Scientific Biography, with Special Reference to J. S. Mill", (in J. M. Robson and Michael Laine (eds.), *James and John Stuart Mill; Papers of the Centenary Conference,* University of Toronto Press, 1976〔杉原四郎ほか訳『ミル記念論集』木鐸社，1979年〕)。

〔26〕 Walker, Donald A., "William Jaffé, Historian of Economic Thought, 1898—1980", (*American Economic Review,* Dec. 1981).

〔27〕 ————, "William Jaffé, *Officier de Liaison Intellectual*", (in Samuels (ed.) 〔23〕).

〔28〕 ————, "Biography and the Study of the History of Economic Thought", (in Samuels(ed.) 〔23〕).

〔29〕 ————, "Is Walras's Theory of General Equilibrium a Normative Scheme?", (in *History of Political Economy,* Vol. 16, No. 3, Fall 1984).

〔30〕 Walras, L. E., "Ruchonnet et le Socialismus scientifique," (in *Revue Socialiste,* July 1909).

〔31〕 安井琢磨「ワルラス」(元来，河合栄治郎編『学生と先哲』日本評論社，1937年，所収：現在，安井琢磨著作集第1巻『ワルラスをめぐって』創文社，1970年，に再録)。

〔32〕 ————(編著)『近代経済学と私』木鐸社，1980年。

〔33〕 安井琢磨・福岡正夫「生誕150年：レオン・ワルラスと現代経済学」(東洋経済『近代経済学シリーズ』69，1984年4月20日号，所収)：「ワルラス生誕150年と現代経済学」(前掲誌，70，1984年9月27日号，所収)。

(東京大学教養学部教授)